

東京農業大学・東京情報大学の最新情報をお届けする

# 新・実学ジャーナル

April+May  
2018  
No.149

4+5



▶ 特集記事

**6学部23学科体制スタート**  
農学・生命科学系総合大学 さらに充実

▶ ZOOM UP

**農芸化学の復興に期待 東京農大 20年ぶりに学科復活**  
キックオフシンポ盛大に開催

▶ **革新的技術研究で社会貢献を** 東京農大総合研究所がシンポ開催

▶ **農大生はどう評価されているか** シンポジウムで討論

私の宝もの My Treasure

小原先生の学恩 高野克己

学校法人 東京農業大学



特集  
記事  
特記

This month's  
special feature  
article



東京農業大学

学長 高野克己

たかの・かつみ/1953年東京都生まれ。東京農業大学大学院農学研究科農芸化学専攻博士前期課程修了。東京農業大学応用生物科学部農芸化学科(食料資源理化学研究室)教授。農学博士。

- 専門分野:農芸化学、食品化学、食品製造学
- 主な研究テーマ:食品のおいしさの秘密を科学する

東京農大

# 6学部23学科体制スタート 農学・生命科学系総合大学 さらに充実

東京農業大学は2018年度、農学部に新学科を設置し、応用生物科学部、生物産業学部の学科名称変更を行い、4月から6学部23学科体制がスタートした。17年度の生命科学部新設など、近年続けてきた学部学科再編はこれで完了し、わが国屈指の農学・生命科学系総合大学としての体制がさらに充実された。学部学科再編の狙い、東京農大が目指すものなどについて、高野克己学長に語ってもらった。

## 未来の社会に貢献するために

——6学部23学科体制がスタートした今春、主な大  
学進学年齢である18歳人口が再び減少に転じる「大  
学の2018年問題」も始まりました。私学経営を  
取り巻く状況は厳しさを増していきます。

**高野** 確かに厳しい状況です。しかし、だから学部  
学科をどうすれば良いかではなく、あくまでも東京  
農大が果たすべき役割は何かを全学挙げて考え、  
そのために必要と考えた体制です。あるべき未来の  
社会に貢献できる学部学科です。

——1989年、北海道オホーツクキャンパスに生物

産業学部を新設するまで、東京農大は長らく農学部  
のみの単科大学でした。学部学科を細分化したこと  
で、学部名、学科名だけでは何を学び、研究する部  
門かが分かりにくくなっています。

**高野** 農学部だけの時代の学科名は、農学、林学、  
畜産、醸造、造園、農業経済など、職業と直結す  
る名称も多く、イメージしやすかったと思います。  
しかし、現代の農学は農業だけを学ぶのではなく、  
時代の変化に合わせて、生命、食料、環境、健康、  
エネルギー、地域創成といった複合的な学問領域を  
扱うようになりました。それに応じた学部学科編  
成を続けた結果ですが、研究領域で重なり合う部

分もあり、学科名だけでその中身を理解するのは  
難しくなっているのは事実でしょう。

——今年の受験生は混乱しなかつたでしょうか。

**高野** 学科名だけで研究内容をイメージしにくく  
なっているのは、東京農大に限らず、農学系の学科を  
持つすべての大学に共通することです。東京農大には  
毎年、3万人を超える人が受験しますが、この規模  
はここ数年、大きく変わっていません。学部学科が増  
えても受験生が変わらないのなら、各学科は待つてい  
るだけでは優秀な学生が集められないということにな  
ります。だからこそ、各学科は何を学び、何を研究  
している学科で、社会にどう貢献できるのかを積極  
的にPRしていかなくてはなりません。自らの研究成  
果を学術誌や学会発表だけでなく広く社会に向けて  
情報発信することは、個々の教員に課せられた重要  
な責務ですが、大学のイベントや学外でのシンポジウム  
開催などを通じて、学部学科ごとのまとまった広報  
活動も重要です。優秀な学生を集めることは、優秀  
な研究成果にもつながります。学部学科間に良い意  
味で競争原理が働くことを期待しています。

## 改革はさらに続く

——6学部23学科体制は、東京農大の学部学科編成  
の完成形ですか？

**高野** もちろん、そうではありません。「農」に課  
せられる課題は、これまでがそうであったようにこれ  
からも、時代と社会の変化に応じて変化していくで  
しょう。東京農大もその変化を先取りするような  
形で、研究教育体制を自ら変革し、時代の要請に  
応えていかなければなりません。「今がベスト」と思



2018年4月に変更のあった学部学科一覧

農学部	
農学科 畜産学科 バイオセラピー学科	農学科 動物科学科 生物資源開発学科 デザイン農学科
農学部	農学部
応用生物科学部	
生物応用化学科 醸造科学科 食品安全健康学科 栄養科学科	農芸化学科 醸造科学科 食品安全健康学科 栄養科学科
応用生物科学部	農芸化学科
生物産業学部	
生物生産学科 アクアバイオ学科 食品香粧学科 地域産業経営学科	北方圏農学科 海洋水産学科 食香粧化学科 自然資源経営学科
生物産業学部	北方圏農学科

うのではなく、「今のままで良いのか」と絶えず自問していかなくてはならない。そう自戒しています。

柔軟な精神 基盤は農の心

——「農大らしさ」とは何でしょうか。

高野 「農大らしさ」と言うと、すぐに教育理念である「実学主義」の言葉が出てきます。しかし、実学主義が何を指すのかは人によつて大きく違います。それでも、実学主義の精神を唱えた初代学長の横井時敬先生が、明治の時代に「農学栄えて農業減ぶ」との箴言を残していたのは、やはり慧眼だと思います。東京農大における研究教育は、やはりそれが世界人類の向上にどう役立つかを常に意識したものでなければなりません。学問のための学問、自己目的化した研究であつてはならない、ということ。——実学主義の教育を受けた東京農大の卒業生は、どう評価されているのでしょうか。

高野 よく聞くのが、東京農大出身者は徒党を組まない、派閥を作らない、そして仕事に専心するという評価です。農大生はさまざまな学科で専門的な教育を受けますが、どの学部学科にあつても共通するのは「農」です。動物、植物から微生物まで、さまざまな生き物について学びます。生き物の動き、働きを見究めることから、生き物の知恵も学び取る。専門性を生かしながら、さまざまな役割を演じることができると特徴ではないでしょうか。

「百姓（ひやくしやう）」とは農民を指す言葉ですが、元々は百姓（ひやくせい）で、百（たぐさん）の姓（か）ばね。天皇から与えられた身分・職業を意味しました。百姓とは百の仕事をこなせる人。そういう精神性を持つ人のことです。農業をしながら大工も、木を伐採し、医者をする。農大生は4年でそうした多様性を知らず知らずのうちに学びます。ですから、在学中よりも卒業後に、より強く東京農大生であつたことを意識するでしょう。一般の大学では、学部学科が違うと、横のつながりは築きにくいのですが、東京農大は違います。どの学部学科であつても「農大」だけで通じ合えるものがある。どんな職業に就いても、社会に出たら、そのつながりを強く意識するはず。——「農学・生命科学系の総合大学」としての強みをどう伸ばしていきますか。

生きるを支える農学

高野 アセアン諸国との交流拠点としてタイ事務所を設置しているタマサート大の関係者から「農業・農学は遅れた学問のイメージが強い。生物学や化学

を前面に出した方が良い」と言われたことがあります。「ずいぶんはつきり言うな」と感じましたが、果たして、日本ではどうでしょうか。

例えば本学では、応用生物科学部の生物応用化学科が4月、農芸化学科に改称しました。この農芸化学科という名称は、ビタミンB<sub>1</sub>を発見し、本学の教授を務められた鈴木梅太郎博士につながる歴史ある学科名です。1998年、旧農学部の学部改組に伴い生物応用化学科に名称を変え、今年20年ぶりに元の名前に戻ったこととなります。20年前の名称変更は、生命現象から環境問題までを広く見渡して考えることができる人材育成を狙つたものですが、農業・農学という枠を取つてしまおうという思いもあつたと思います。本学に限らず、全国の農学部で農芸化学科の名称変更が相次ぎました。

確かに農学の始まりは食料生産を中心とした生産農学でしたが、より豊かな社会を実現するため、農学はその対象を生活資材や生命、環境と広げていきました。その進化の過程で農学の「農業」外しが起きたのだと思います。ですが、日本学術会議が「生命科学系の総合科学」と定義しているように、農学は生きることを支える幅広い学問領域です。気候変動や人口爆発など、人類全体が直面する課題に対して「農」が果たす役割は極めて大きい。

農業を冠した唯一の大学である東京農大を志望する人たちに、農業・農学に対するマイナスイメージを持っている人はいないでしょう。学部・大学院の実学主義の教育研究を通して有為の人材を社会に送り出し続けることで、評価をさらに高めていきたいと思います。

## 農芸化学の復興に期待

# 東京農大 20年ぶりに学科復活

## キックオフシンポ盛大に開催

東京農業大学応用生物科学部の生物応用化学科は2018年4月、「農芸化学科」に名称変更した。同学科は私大で最も歴史のある「農芸化学科」だったが、1998年に生物応用化学科に名称変更し今回、20年ぶりに学科名称が復活した。これを機に開かれたキックオフシンポジウムでは、単なる名称変更にとどまらない、さまざまな熱い期待の声が寄せられた。

### ルーツは鈴木梅太郎

「農芸化学」とは、一般には耳慣れない言葉かもしれない。農芸化学は、生命、食糧、環境の3つのキーワードに代表される「化学と生物」に関連したことがらを基礎から応用まで幅広く研究する学問分野のことだ。その祖と言われるのが鈴木梅太郎である。国民病と言われた脚気の原因究明の過程からオリザニン（ビタミンB<sub>1</sub>）を発見した鈴木は、その後、合成清酒を発明し、乳児用粉ミルクを開発するなど、生活に直結する幅広い研究を続けた。

東京農大農芸化学科の開設には、鈴木が深く関わっている。鈴木は東京帝国大教授を務める傍ら、肥料の分析技術者を養成する東京肥料分析講習所の所長を務めていた。1913年、鈴木はこの講習所を東京農大に寄付すると同時に東京農大の教授に就任し、植物栄養論の講義を担当した。これが東京農大農芸化学科の前身で、東京肥料分析講習所の始まりから数えると、今年で110年になる。鈴木は24年、日本農芸化学会を創設し、国民生活の向上に幅広く寄与する学問として、その必要性が理解され、戦後は多くの大学農学部で農芸化学科が設置されていった。

### 農芸化学復興のきっかけに

キックオフシンポジウムは3月6日、東京の丸ビルホールで、食品・酒造・製菓・乳業など約100社の企業の約200人が参加して開かれた。まず高野克己学長が「伝統ある名前を、今なぜ

復活させたのか。その思いを知っていただきたい。今日のシンポジウムを企画した。みなさんから多くの批評をいただき、110年の歴史を新たなものにしていきたい」とあいさつ。大澤貫寿理事長は「今日の催しを新たな出発として、さらに前進していったほしい」と期待を語った。

来賓の別所智博・農林水産省技術総括審議官は「伝統ある名称が復活することを喜びたい。単に古き良きものを懐かしむのではない。AIやロボテックスの活用など新しい農業のあり方が探られている現在、農学も工学や医学など幅広い技術研究分野との融合が求められている。それに応える人材育成に、すそ野の広い、学際的色彩の強い農芸化学科が大きな役割を果たしてくれることを期待している」。道野英司・厚生労働省食品監視安



農林水産省大臣官房技術統括審議官  
農林水産技術会議事務局長  
別所智博さん

全課長も「食品の原材料入手から製品出荷まで、全工程の安全を確保する衛生管理の手法HACCP（ハサップ）の制度化など、食品の安全管理分野では幅広い専門的知見を持つ人材の需要が増している。食品安全分野にも多くの人材を輩出してもらいたい」と期待を語った。



厚生労働省医薬・生活衛生局食品監視安全課課長  
道野英司さん



東京大学教授 日本農芸化学会会長  
佐藤隆一郎さん

また、日本農芸化学会会長の佐藤隆一郎・東大教授は「日本農芸化学会は2024年に創設100年を迎える。これまで、学会と東大農学部、そして東京農大は絶えずトライアングルを形成し、農芸化学の発展に寄与してきた。その中心にいたのが鈴木梅太郎先生だ。先生は東大農学部から東大農大に移るに当たり、東大の研究棟の払い下げを受けて東京農大に寄付するなど、東京農大農芸化学の発展に大きく貢献した。かつて多くの大学にあった農芸化学科だが、大学改革や学部学科の再編の動きの中で名称変更が相次ぎ、農芸化学科が消えてしまった。現在では明治大、高知大の2大学のみで東京農大で三つめとなる。単に学科名だけのことではなく、農芸化学のアイ

デンティティを取り戻し、再興させるといふ点で大きな意義のあることだ。今回の名称変更がその起爆剤となることを期待している」と述べた。

### 「サントリーは農芸化学とともに発展」

続いて、洋酒、ビール、清涼飲料メーカーのサントリーグループの清涼飲料部門を担うサントリー食品インターナショナルの辻村英雄副社長が「研究開発で事業を興す」との演題で基調講演した。

辻村氏は1907年発売の「赤玉ポットワイン」、29年発売の国産ウイスキー第1号「白札」に始まる勃興期から、現在の青いバラや、「セサミン」などサプリメントの開発に至るまで、サントリーの歴史が絶えずオンリーワン商品開発の挑戦の連続であったことを紹介。その基盤には、高い研究開発能力があり、その研究分野はまさに農芸化学の範ちゅうに重なる。農芸化学科出身の研究者も多く、「サントリーは農芸化学とともに発展してきた」と強調した。



サントリー食品インターナショナル(株)  
取締役副社長 辻村英雄さん

### 若手教員が最先端研究を紹介

東京農大農芸化学科には、土壌肥科学、植物生産化学、生物有機化学、応用微生物学、栄養生化学、食料資源理化学の6研究室がある。休憩を挟んだ第2部では、この中から30代の若手教員4人が、自らが取り組んでいる最先端研究の内容を紹介した。梶川揚申教授が「乳酸菌がもつ免疫調節機能の応用」、鈴木司助教が「栄養代謝を越えた飢餓シグナルの新展開」、齋藤彰宏助教が「植物オルガネラから見えてきた次世代の環境ストレス耐性作物の開発」、大島宏行助教が「持続可能な農業を目指した土壌肥料学的アプローチ」の題で、分かりやすく解説した。

最後に山本祐司教授が「伝統ある名前を復活することで、過去を大事にしながら新たな発見を続けていきたい。鈴木梅太郎先生は『新しい概念は新しい産業を生む』と言っていた。私たちが新しい物づくりができる人材を育てていきたい」とあいさつし、会を閉めた。



山本祐司教授

(東京農業大学客員教授・鈴木敬吾)



# 革新的技術研究で社会貢献を

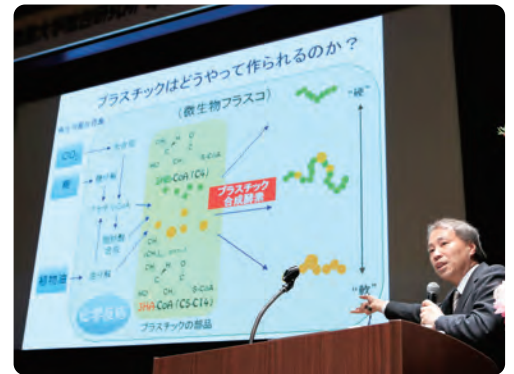
## 東京農大総合研究所がシンポ開催

東京農業大学総合研究所は同研究所が中心となって進める研究プロジェクトのうち、特に先端的な研究を紹介する革新的技術研究成果報告会を東京・千代田区の丸ビルホールで開催。集まった幅広い企業の関係者らに農大の強み・特色をアピールした。

報告会は3月9日に開かれ、食品、流通などの企業や個人約130人が参加した。まず高野克己学長が「革新的とは失敗を恐れず積極的に取り組むことだ。農大という地道にコツコツというイメージがあるかもしれないが、今日は農大の革新にチャレンジする研究をお見せしたい。積極的な批評を仰ぎたい」とあいさつし、交流を呼びかけた。

農大の特色・強みを生かすため3年にわたり特別な予算措置を講じる「学部長主導型研究プロジェクト」に加え、「大学院先導的実学研究プロジェクト」（農大ブランドによる地方創生を目標とした6次産業化プロジェクト）の研究結果が発表された。

学部長主導型研究からは、代表者の矢嶋俊介・生命科学部長がプロジェクトの概要を紹介した後、生命科学部の田口精一教授が「農大発イノベーション〜稲わらから『バイオプラスチック』をつくる」を発表した。世界で毎年1・5億トンの石油プラスチックが生産されているが、分解されないため、地球環境に負荷がかかっている。田口教授は農大伊勢原農場から調達した稲わらを酵素分解し、そこで得た糖化液を微生物に供給し培



バイオプラスチックについて説明する田口教授



矢嶋学部長

養することで透明性に優れたバイオプラスチックの素材を合成するプロセスの開発に成功。今後は生産性を向上させ、物性を生かした用途開発を産学連携活動によって推進するという。

大学院先導的実学研究からは、代表者の堀田和彦・国際食料情報学部教授からプロジェクト全体と経済グループの発表があり、地域環境科学部の江口文陽教授が「きのこを添加した味噌の試醸〜その機能性と製品化に向けた試み〜」、応用生物科学部の小野瀬淳一准教授が「多機能性を付加した野菜の開発」、農学部の岩田尚孝教授が「胚移植を用いた農大和牛の作成」、農学部の小川博教授が「ホロホロチョウブランドの創出」を発表した。

質疑応答の時間では、田口教授に対し「バイオプラスチックの分解のスピードはコントロールできるのか」や、小川教授に対し「ホロホロチョウの経営規模の想定は」「卵を用いたプリンの価格設定をどうするか」など、具体的な質問が相次ぎ、参加者の関心の高さをうかがわせていた。

最後に総合研究所の山本祐司所長が「私たちの研究が実社会で最終的に製品化され成果を出すためには、みなさまの協力、アイデアが欠かせない。農大では、社会に役立つ研究が数多く進められている。研究成果報告会は今後も開催する。次回もぜひ参加をお願いしたい」と呼びかけ、会を閉じた。

（東京農業大学客員教授・鈴木敬吾）



小川教授



岩田教授



小野瀬准教授



江口教授



堀田教授



# 農大生はどう評価されているか

## シンポジウムで討論

東京農業大学、そして農大生・卒業生は社会からどう評価され、何を期待されているか——。こんなテーマのシンポジウムが開かれ、農大出身教員、他大出身教員、学生、卒業生、大学の実習で学生を受け入れている農家などが、熱く語り合った。

シンポジウムは東京農大総合研究所研究会の就農者推進教育研究部会が「社会が求める農大気質（スタイル）」のタイトルで主催。3月7日、厚木キャンパスで約80人が参加して開かれた。

東京農大出身で副学長の後、熊本県立大理事長を務めた蓑茂寿太郎さん、高知県のカンキツ農家で農大生の農業実習を数多く受け入れている野村高志さん、東京大出身の馬場正・東京農大農学部教授がパネラーとなり、就農者推進教育研究部会の前部会長、宮田正信さんがコーディネーターを務めた。

まず、社会の中での農大・農大生の位置づけについて、蓑茂さんは公立大の経営に携わった経験を踏まえ、「大学の評価は、①組織②教員③卒業生④学生の四つの評価に分けられる。農大の組織は、他の大学・農学部 비해、研究と教育、社会貢献の面で分野のすそ野が圧倒的に広い。これは高く評価されており、このすそ野の広さを生かせば、農大はさらに良くなっていく」と語った。またカンキツ農家の野村さんは、受け入れている他の農業実習生と比較して「農大生は『自分に合った大学が東京農大です』と実感している人が多いのではないかと。自由でのびのびとしており、指導する私に、何とかこの子の潜在能力を引き出そうと思わせてしまう学生が多い」と評価した。

一方、東大出身の馬場教授は「学生が農大の看板を背負う必要はない。学生はバラエティに富んでおり、パーソナルな問題だ」と前置きした上で、「それでも、農大生のチャレンジする力の平均値は高いと感じる。教員の研究も実は学生に大いに助

けられている。教員と学生の一体感がある。

東大では一切なかったことだ」と指摘。これに対し蓑茂さんは「それは耳にタコができるほど聞かされている『実学主義』を実践しているからだろう。農大では教育と研究はコインの表裏の関係で、教員と学生が一体となって取り組んでいる」と解説した。

実学主義に関しては、会場の学生が「実習生として受け入れてくれる農家が各地にあり、全国を回っている。素晴らしい学びの場になっている」と発言。馬場教授は「農大は農業実習をきめ細やかに用意しており、非常に面倒見がいい。ただし、実学とは決して実用的な学問ではない。実のある学問のことだ。農業の現場でさまざまな学びのきっかけをつかみ、卒業論文などにつないでいくことを望んでいる」と期待を語った。

また、農大生については、静岡のミカン農家の男性が「実習生を受け入れているが、農大生は日常のあいさつがしっかりでき、元気が良く挑戦心に富んでいる。それは農大に志をもった先生がいて、しっかり指導しているからだろう」と評価した。

（東京農業大学客員教授・鈴木敬吾）



左から宮田前部会長、蓑茂さん、野村さん、馬場教授、平野部会長



私の宝もの  
My Treasure

## 第1回

## 小原先生の学恩

東京農業大学 学長 高野克己

たかの・かつみ／東京都生まれ。1977年東京農業大学農学部農芸化学科卒業。同大学院博士前期課程修了後、85年農学博士号取得。98年に同応用生物科学部生物応用化学科教授。専門は農芸化学、食品化学、食品製造学。

「私の宝もの」と聞き、何だろうかと考えましたが、やはり、小原先生との出会いを挙げないわけにはいきません。先生と出会わなければ、研究者の道を歩むこともなかった。研究者として、指導教官として、かくありたいと願う理想の方です。

小原哲二郎（おばら・てつじろう）先生は1904年、岩手県に生まれ、苦学して農学を修め、雑穀の研究と開発利用の功績で44年に内閣技術院賞と農学博士の学位を取得。戦後、東京教育大（現・筑波大）教授を経て、71年から東京農大教授を務められました。私が入学したころは農芸化学科の学科長でした。パン業界や果汁業界の指導で大きな功績があり、食品について学びたいと考えていた私は、迷わず先生の農産製造学研究室に入りました。たまたまでしたが、大学院に進みそうな同期はおらず、後から聞いたことですが、先生は「高野を大学院に上げさせるように」と周りに指示していたようです。

私が学部を卒業した翌年、先生は定年退職されました。「宝モノ」としては、指導していただき書き上げた博士論文になるのでしょう。改めて手に持つと、重みを感じます。でも、その後のお付き合いの方が長かったのです。

先生は退職後も、日本食品科学工学会の重鎮として活躍され、客員教授を務められていたこともあって、学会にはかばん持ちとしてお供しました。先生が姿を現すと、教育大時代の教え子の方々が緊張されるのが分かりました。非常に厳しい先生として有名だったと聞き、驚きました。私には、全くそんな記憶がないからです。先生ご自身が年齢を重ねられていたこともあったのでしょうか。慈父の眼差しで指導をいただきました。

ただ、事前に学会のプログラムを見た先生が「うちの発表が無いのは、おかしくないか」とつぶやかれ、急いで研究発表をまとめ上げたこともあります。

夕方になると、研究室によく電話がかかってきました。ほとんど毎日です。研究の進ちょく具合を尋ねられたり、代々木上原にお住まいで、食事にも誘っていただきました。特別な話をしたわけではないのです。ですが、いつしかそれが日課のようになり、大きな励みになっていたのだと思います。91年に先生が亡くなると、大きな喪失感に襲われました。ちなみに都内の霊園にある先生のお墓には、電話機のモニュメントが置かれています。電話がお好きだったんです。

小原先生の後に指導していただいた鴨居郁三先生も同じですが、昔受けた指導を、「ああ、そういうことだったのか」と今になって得心することがあります。指導の中身ではなく、手順のことで、両先生とも、最適の指導法は何かを考え、手順を工夫しておられた。その点、私は全くダメです。学生ではなく、自分の都合で結論を急いでしまう。まだまだ未熟だと反省するのです。

（まとめ・東京農大客員教授、鈴木敬吾）



▲思い出の博士論文を持つ高野学長。学部生時代には米ぬかの脂質分解について研究した。



▲故・小原教授

## 東京農業大学の沿革

## 榎本武揚と横井時敬

創設者は、明治の英雄榎本武揚だ。明治政府で通信相、農商務相、文相、外相などの要職を歴任した榎本は、1891（明治24）年、東京に「私立育英塾」を設立した。その農業科が東京農学校、東京高等農学校と名を替えつつ、拡充の歴史を歩み、今日の東京農業大学となる。東京農学校時代の1895（明治28）年、評議員として参画したのが、明治農学の第一人者横井時敬だった。「人物を畑に還す」「稲のことは稲にきけ、農業のことは農民にきけ」と唱えて、「実学」による教育の礎を築き、東京農業大学の初代学長を務めた。本学の「生みの親」は榎本、「育ての親」は横井である。

## 高等教育から初等教育まで

東京農業大学は、農学部、応用生物科学部、生命科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部、生物産業学部の6学部23学科からなり、大学院は2研究科20専攻体制が整っている。世田谷、厚木、北海道オホーツク（網走）の3キャンパスに約13,000人が学んでいる。学校法人東京農業大学の傘下には、東京情報大学（千葉）があり、総合情報学部、看護学部の2学部2学科と大学院1研究科に約2,000人が学ぶ。また、併設校として農大一高／中等部（東京）、同二高（群馬）、同三高／附属中学校（埼玉）がある。2019年度には、東京農業大学稲花小学校が世田谷に開校予定である（設置認可申請中）。

|2018| 東京農大創立127年

学校法人 東京農業大学

- ◆東京農業大学 ◆東京情報大学 ◆東京農業大学第一高等学校
- ◆東京農業大学第二高等学校 ◆東京農業大学第三高等学校
- ◆東京農業大学第一高等学校中等部 ◆東京農業大学第三高等学校附属中学校
- ◆東京農業大学稲花小学校（2019年4月開校予定／設置認可申請中）